日本とユーラシアの交流
―飛鳥寺を手掛かりに―

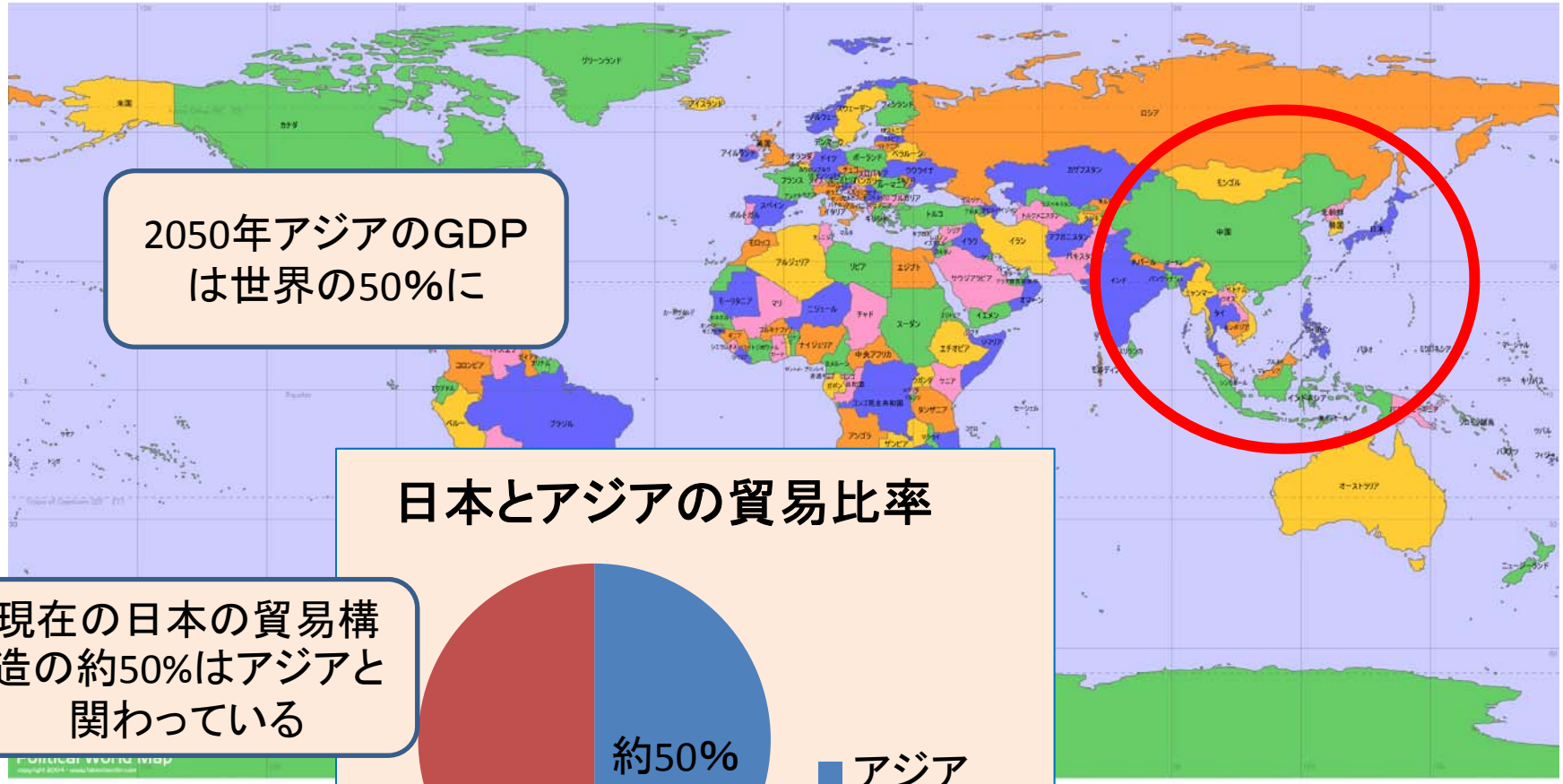
アジアダイナミズム班

市村江梨果　伊東佑馬
勝山義弘　杉山友哉
多部田裕也　又吉雄一
宮崎真　吉田剛司
王星星

目次

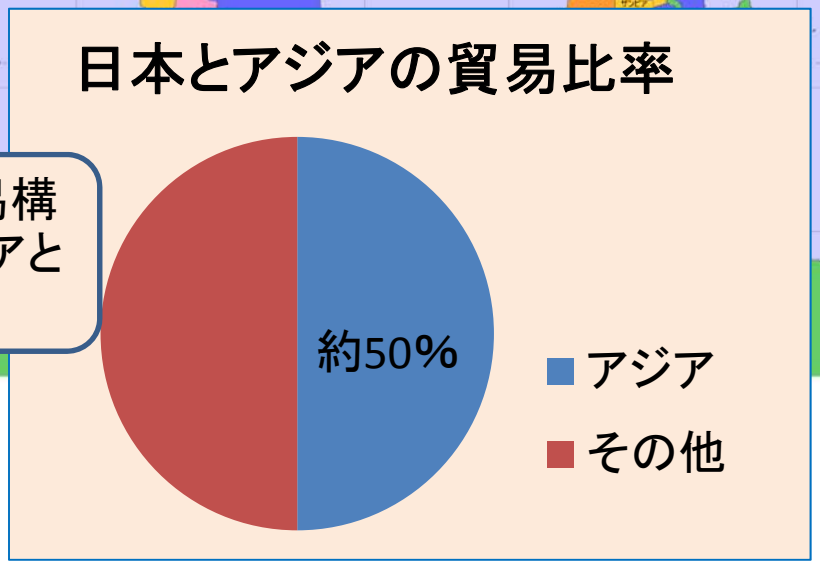
1. 問題意識
2. 飛鳥寺とは
3. 「アスカ」の由来
4. 飛鳥寺に携わった人
    1. 蘇我氏
    2. 物部氏
    3. 聖徳太子
5. 飛鳥寺と渡来人
    1. 伽藍配置
    2. 瓦
6. 飛鳥寺の基になった寺院
7. 宗教
    1. キリストと仏教
    2. 現状とまとめ
8. 七福神
9. 結論
    1. 結論①
    2. 結論②
    3. ゲートキーパー論
10. 計画

問題意識①：世界の現状



2050年アジアのGDPは世界の50%に

現在の日本の貿易構造の約50%はアジアと関わっている



※財務省の貿易統計より参照

問題意識②：日本とアジアの国際関係

戦後最悪の日中関係・日韓関係に！

東アジアの「政冷経凍」と揶揄される事態に！

東アジアでナショナリズムが高揚！

問題意識③:アジアの共通価値

・飛鳥寺はアジアの共通価値の一つ
・なぜならば、初の「日中韓の国家間プロジェクト」といえるからだ

技術

仏教

人

ユーラシアの風

飛鳥寺を手掛かりに研究

仏教伝来

瓦

寺院

聖徳太子

蘇我氏

七福神

2.飛鳥寺とは

- 飛鳥寺

現在の公称:鳥形山　安居院

別称:法興寺、元興寺

創建年:596年

所在地:奈良県高市郡明日香村飛鳥

開基:蘇我馬子

真言宗豊山派

4.「アスカ」の由来から分かること

『アスカ』という言葉の由来は、仏教が伝えられる間に通ったインド、中国、朝鮮の各国の文化、そして日本の飛鳥寺の建設当時の地形や時代背景が反映されているのではないだろうか。

	読み方説			漢字説	
	外来説（朝鮮）	外来説（インド）	地形説	漢字二文字説	鳥説
定説	渡来人が日本に来て安住の宿とした場所を安宿（あすか）と名付けた。安宿（あすか）は、朝鮮語で「やすらかなるふるさと」という意味のアンスク、これが訛って「アスカ」になった。	仏教発祥の地インドのアショカ王の名前から転訛したもの。インドでは「アスカ」とは理想の楽園という意味の言葉だとも言われている。	地形を表現する単語が合成されて出来たものである。ア（接頭語）スカ（洲処ー川水、海水等によって生じた砂地）、またはアス（浅すー川、海等が浅くなる又は水が涸れる）＋カ（処）である。	阿須賀→明日香→飛鳥という様に変化していった。「明日香」は神である太陽（日）が文字の中に3つ付く。「飛鳥」は万葉集の一句にある「飛ぶ鳥」がアスカと読むようになったもの。	古代においては、年号に白雉、朱鳥、白鳳などと鳥の名前を用いることが多かった。鳥は尊い存在とされていた。アスカは「イスカ」という鳥の名前から転訛したもの。
否定説	この説が出されたのは1920年（大正9年）に出版された『日本古代文化』（和辻哲郎）という本である。近年に出された説であるため信憑性が薄い。			藤原宮跡の発掘により発見された木簡に書かれていた一文に「飛鳥」という文字があり、この木簡は七世紀末のものだと判断された。「飛鳥」の文字が使われた最古の用例である。	

4.「アスカ」の由来から分かること

- 飛鳥寺 → 正式名称は**法興寺**である。
- 法興寺とは仏教の寺院であるが、「アスカ」の由来は仏教と直接関係ないのではないか。

↓

法興寺が「飛鳥寺」と呼ばれることを受け入れたということは、仏教が日本に伝えられるまでの過程で、多様な異文化を受け入れる要素を身に付けたのではないだろうか。

異なるものを受け入れる懐の広さと、大雑把でありながらも「良いものは良い」という考え方が日本の特徴となった。

4.飛鳥寺を作らせた人

- 有力豪族の蘇我氏が国を統治するために、仏教を使って国を治めようとした。
- その仏教の象徴として蘇我氏が飛鳥寺を建造した。
- 587年：用明2年　その蘇我氏（蘇我馬子）は物部一族を滅ぼす。その後、飛鳥寺の建造が始まる。

その後、蘇我氏は朝鮮半島から多くの渡来人を支配下にし、
倭国（日本）の繁栄につとめる。
595年には高句麗から恵慈が渡来。聖徳太子の師となる。
その聖徳太子は蘇我氏と協力し、繁栄に努める。

4-1.蘇我氏

- 蘇我氏とは、蘇我石川宿禰（そがのいしかわのすくね）を祖先とする、飛鳥地域を本拠としている、6世紀～7世紀前半（飛鳥時代）にかけて活躍した有力豪族
- その子孫である蘇我馬子は、仏教で国を治めようと、飛鳥寺の建設を始める。
- 蘇我馬子、蝦夷、入鹿は大陸文化を積極的に日本に取り入れ、国の発展に努めていく。

4-1.蘇我氏の出生の各説

大和国高市郡曾我説	臣姓（おみかばね）を名乗る豪族は自らを出身地の地名の氏を名乗ることからきた説	
大和国葛城説	推古三十二年に馬子が天皇に葛城県を本拠だとし、割譲を要求したことや、蝦夷が皇極元年に葛城で八侑（やつら）の舞をしたことからの説	
河内国石川郡説	武内宿禰（すくね）の子供の石川木村が改姓して蘇我氏になった、その朝臣は石川出身だから。	
渡来人説	5世紀後半の百済官人「木満致（もくらのまんち）」と竹内宿禰の子の「蘇我満智」が同一人物であるという説。	①木氏は百済でも名門貴族なのに、なぜ木氏を名乗らなかったか？ ②木満智は百済の王の命令で南に逃げるが、その南は新羅だった。

4-2.物部氏

- 大和政権の豪族。大伴氏と並び軍事力を担い大連（おおむらじ）となる
  - 大連（おおむらじ）：古墳時代のヤマト王権の役職のひとつ。大夫を率いて大王（天皇）の補佐として執政を行った
- 蘇我氏と崇仏の是非を争った氏族

{物部尾輿（おこし）の頃から蘇我氏と対立する}

- 物部氏の足跡そのものを正確に読み取れるテキストがないため、謎の氏族となっている

4-2.蘇我氏VS物部氏

- 蘇我氏は仏教崇拝の立場をとった
  - 仏教を日本に導入する際に、隣国はすべて仏教を崇拝していると主張した

- 物部氏は仏教廃仏の立場をとった
  - 仏教を崇拝する事は日本古来の天地社稷ハ百万（てんち　しゃしょく　やおろず）の神々の怒りを買うことになると主張した

- こうした意見の相違から争いに発展した
  - 蘇我氏が物部一族を滅ぼし、蘇我氏に対抗する勢力がいなくなり、蘇我氏が仏教を日本に広めていく⇒丁未の乱（ていびのらん）：物部氏滅亡

4-3.聖徳太子

聖徳太子は、蘇我氏の血を濃く受け継いでいた。
当時、蘇我馬子を除いた血族の中で唯一仏教に帰依しており、仏教を広めることに力を尽くしていた。

飛鳥寺は異国の文化、技術を用いて作られたものである。
蘇我馬子はそのきっかけを作ったが、自らが政策を行い仏教を広めてはいなかった。一方、聖徳太子は仏教を受け入れ、仏教を取り入れた政策、冠位十二階や十七条の憲法を制定した。仏教を分かりやすく、独自の解釈で翻訳した三経義疏を著すなど、現代にまで続く仏教の基板を作り上げた。

4-3.聖徳太子

聖徳太子と蘇我馬子は決して友好的な関係だとは言えないだろう。互いの力を恐れつつ、利用し合い、潰し合わなかったのは、共存関係にあったからではないか。

↓

お互いに牽制し、利用しあっている現代の日中韓関係と似ていのではないか。

二人の共存関係を調べることで、現代の取るべき方向性が見えてくると考える。

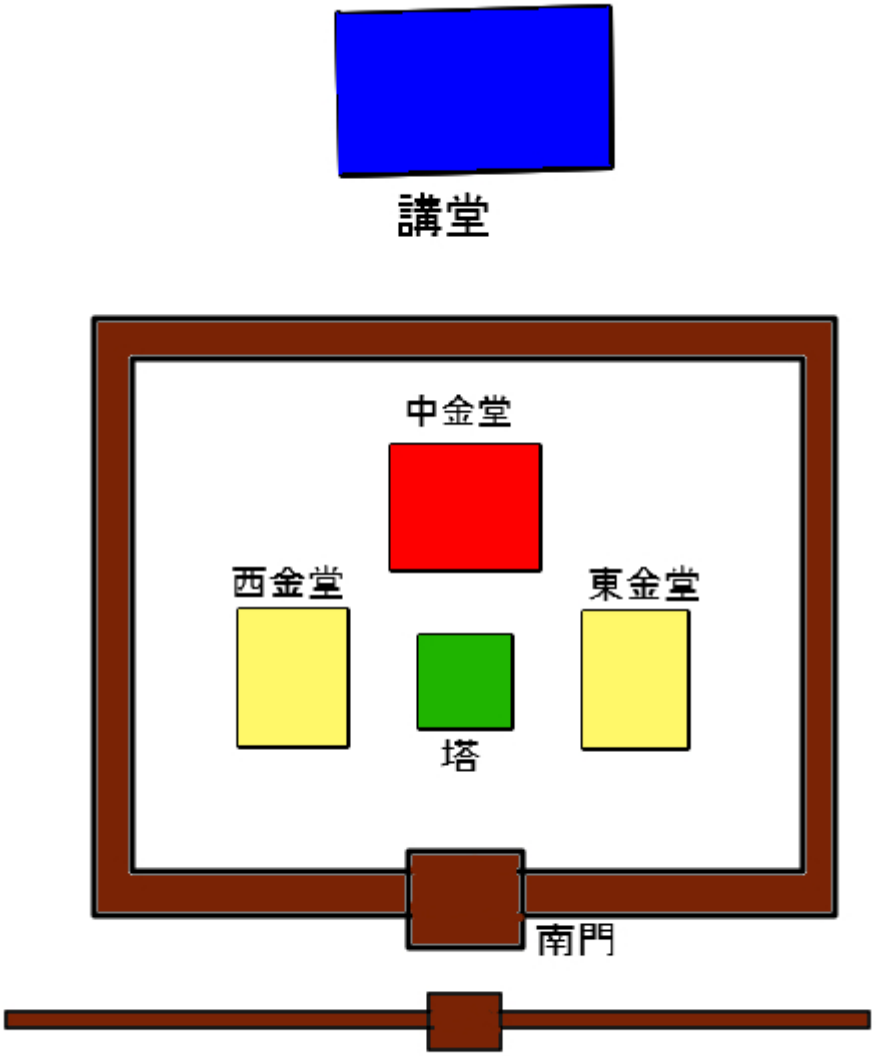
5-1.伽藍配置

飛鳥寺 伽藍配置

・1956~57年発掘調査により判明

・日本最古の伽藍配置

・朝鮮半島の平壌(当時の高句麗)に類似する伽藍配置の寺院がある。



飛鳥寺　伽藍配置

5-2.瓦

・飛鳥寺建設から瓦が使われた。

・瓦は渡来人から受け継ぎ、
今も使われている技術です。

・日本独自に瓦が改良され、
1000種類ほど分類もできます。

588年	渡来人により技術伝来
694年	初めて宮殿に瓦が採用
724年	財のある庶民は瓦葺きを推進
1580年	寺から城へと範囲拡大
1657年	庶民の瓦禁止令
1674年	桟瓦の登場
1720年	禁止令の撤廃
1723年	制度も整い庶民が瓦を葺きやすくなる
1925年	関東大震災により瓦の需要減少

6.飛鳥寺のもとになった寺院

朝鮮からの渡来人たちが建設した飛鳥寺と、当時の朝鮮半島で建設された寺院の関係を研究した。

当時の百済に建設された寺院

- 定林寺址

  発掘調査によって定林寺から出土した瓦や置物などが、飛鳥寺から出土したものと類似しており、出土した品の作られた年代や性質が同じであった。

- 王興寺址

  定林寺と同じように飛鳥寺から出土したものと類似した品が発見された。また、建物の塔心礎などの様式が同じなど、共通点が多くみられる。

6.飛鳥寺のもとになった寺院

飛鳥寺と同じ建築様式だと考えられる他の寺院

- 清岩里廃寺

  高句麗で建てられた寺院であり、現在の北朝鮮の平壌にある。飛鳥寺と同じ一塔三金堂式の伽藍配置であるが、塔の形が違うなど細部において異なる点が多く、全く同じ様式ではない可能性が高いとされている。

飛鳥寺は日本で唯一の一塔三金堂式の伽藍配置の寺院であり、この様式は高句麗から伝来したものだと考えられていたが、百済の寺院とも建築様式の細部において共通点が多く見られた。また、様式が同じと思われていた高句麗の寺院とは細部の異なる点が多くあることも分かった。したがって、飛鳥寺は百済の渡来人が百済の技術をもって建設した寺院である可能性が高いことが現段階では分かっている。

7.キリスト教と仏教

日本におけるキリスト教との比較

- 何故、キリスト教について？

超地域性・・・仏教と同様、ある特定の地域に縛られない宗教

超地域性→諸地域の交流をもたらす

どう、キリスト教と仏教は、他の文化集団に受け入れられたのか？受け入れには、どのような違いがあったのか？

7.キリスト教と仏教

キリスト教と仏教の概要

- キリスト教
- ナザレのイエスが神からの啓示、をキリスト（救い主）として信じる宗教。東方諸教会・カトリック教会・プロテスタントなどは「父と子と聖霊」の三位一体を唯一の神として信仰する。
- 世界における信者数は20億人を超えており、すべての宗教の中で最も多い。

- 仏教
- インドの釈迦を開祖とする宗教である。キリスト教・イスラム教と並んで世界三大宗教の一つで、一般に仏陀（目覚めた人）の説いた教え、また自ら仏陀に成るための教えであるとされる。
- 主な特徴は多神教であり、大きく宗派を大乗・上座に分かれ、各地無数に宗派が異なっている

7.キリスト教と仏教

仏教が広まった理由

①儒教的な考えからの解放

②他の宗教と共存するのに長じた宗教

③特定の民族に限定されない普遍的な宗教

キリスト教がそこまで根付かなかった理由

①日本人の土壌は八百万の神であり信条は多神教である。

②歴史的背景（キリシタン禁止令、宗教戦争など）

7.キリスト教と仏教

国民に、宗教に関するアンケートの無宗教と慨する回答の割合

	電通総研　2006年調査	ギャラップ　2007年～2008年調査
	「宗教を持たない」と答えた割合	「宗教は重要ではない」と答えた割合
日本	52%	73%
中国	93%	-
韓国	37%	54%

※出典：国別調査宗教観調査

当時の「宗教を信仰する」というは、現在の感覚と少し異なっている。仏教を信仰するということは日本と各アジア国との当時唯一の共通するものであり飛鳥寺などの交流も仏教という外枠があるから生まれたものだと考える。

8.七福神

七福神とは平安時代末期以降、
日本の一般庶民がひとまとめにした恵比寿、
大黒天、毘沙門天、弁財天、布袋、福禄寿、
寿老人から成る起源やご利益の内容も
関係なく集められた神様の集団である。

神様の起源は日本、インド、中国など様々。
日本へ伝来する過程で名前や姿、ご利益が別の
ものへ変化した神様も存在する。当時、求められ
たご利益を付け加えられたりもした。

8.七福神

七福神とは、日本人がもつ特徴を表している。
柔軟な多様性、受容性が日本人の中に存在していたからこそ、異国の文化、宗教でできた神様を自由自在に変化させ、自分達に都合の良い神様を作り上げていったのではないか。

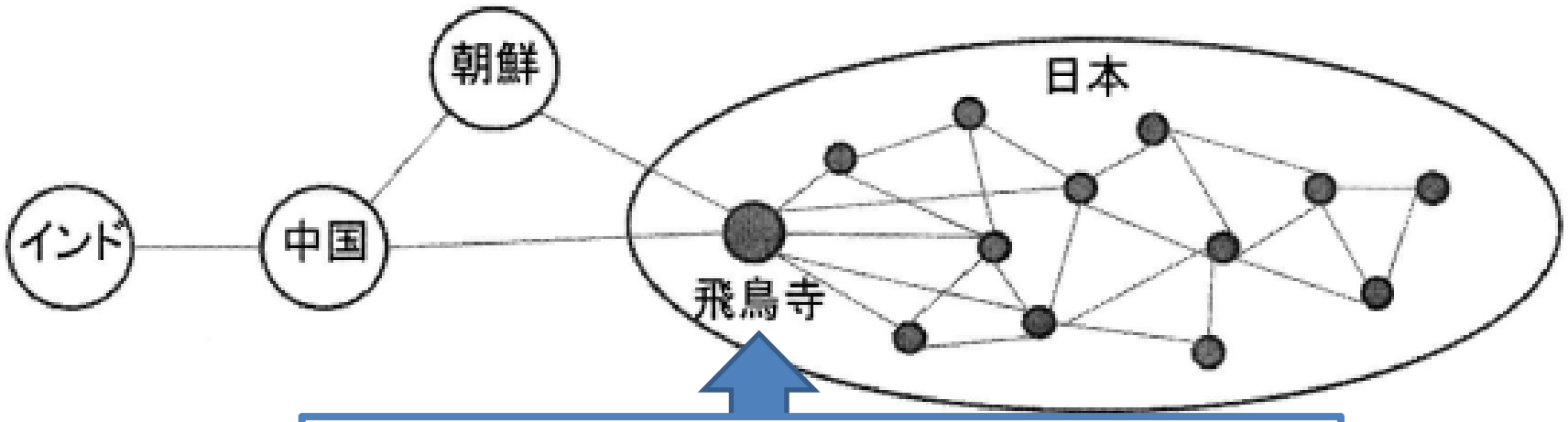
日本はアジアだけでなく、ユーラシアをも取り込み、受け入れている。

↓

アジアの価値観は多様なものであり、一つにまとめられるものではないのだろう。

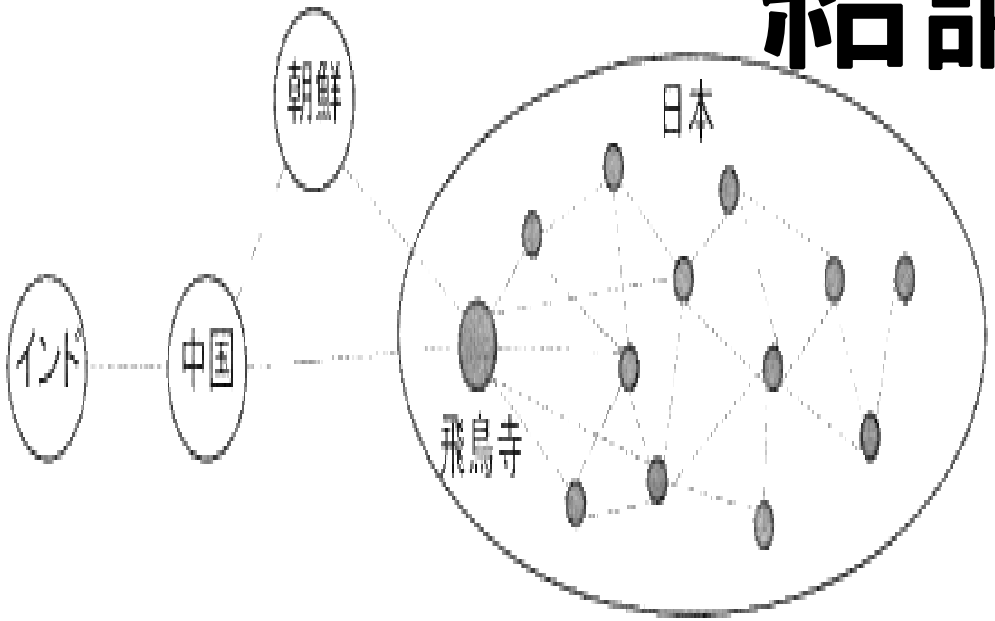
飛鳥寺の持つ意味を
ゲートキーパー論から考察

◆「ゲートキーパー」とは、直訳すると「門番」だが、経営学では、
① 専門知識を持つ人であり
② 組織の境界を越えて、組織の外の情報と組織の内部の情報をつなぎ合わせる
③ 外部の情報の意味を翻訳して内部に展開し、内部の理解を助けて外部の力を利用できるようにする人である



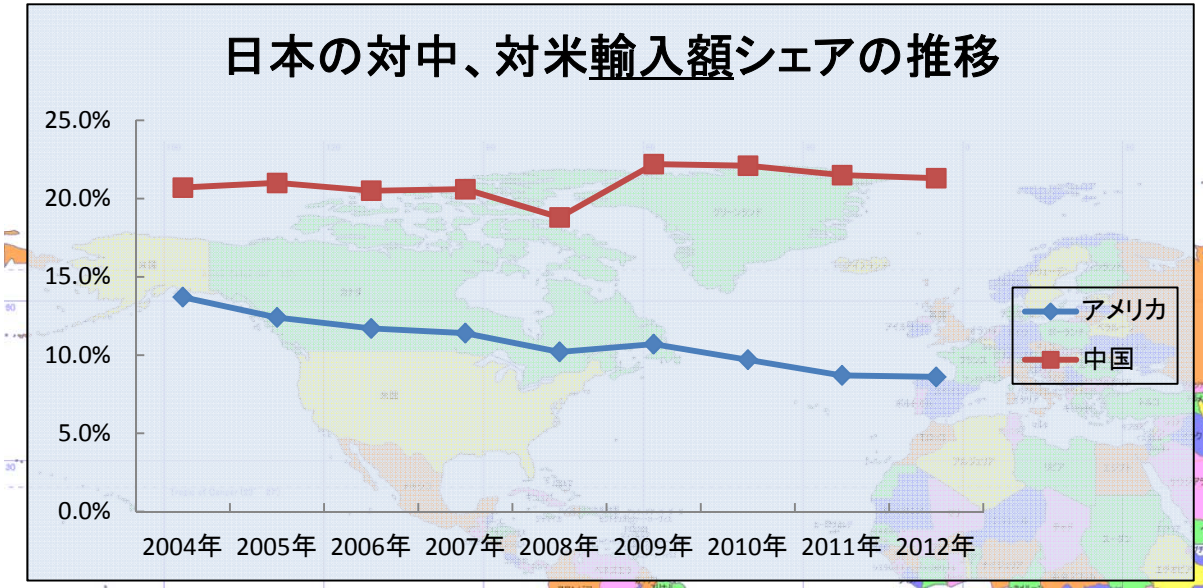
ゲートキーパー的役割を担った！

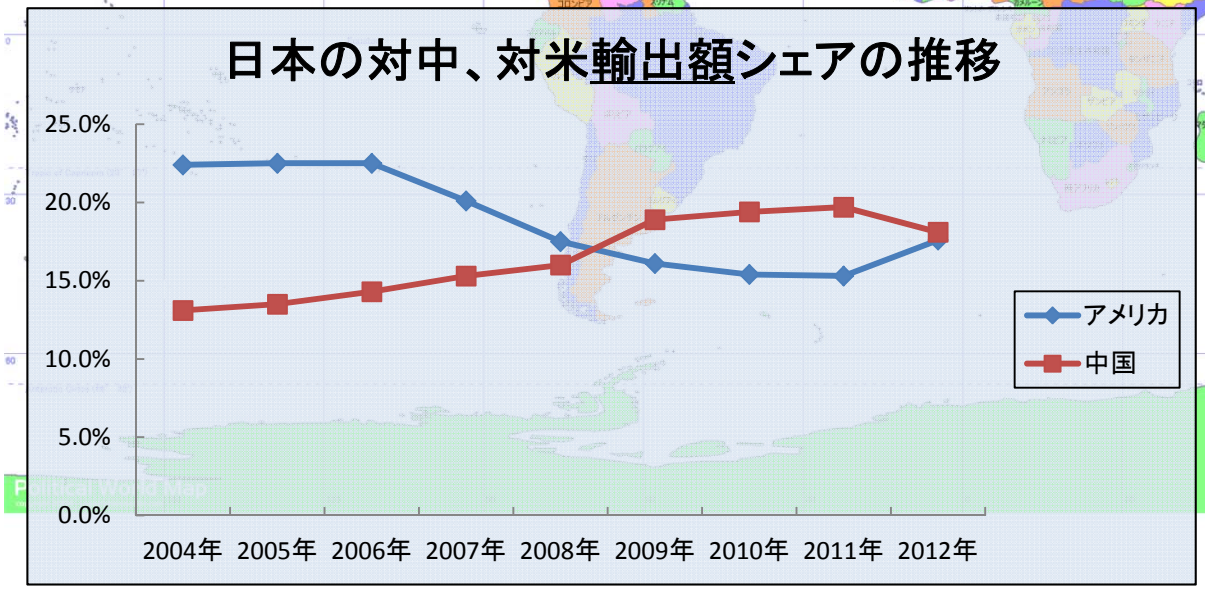
結論

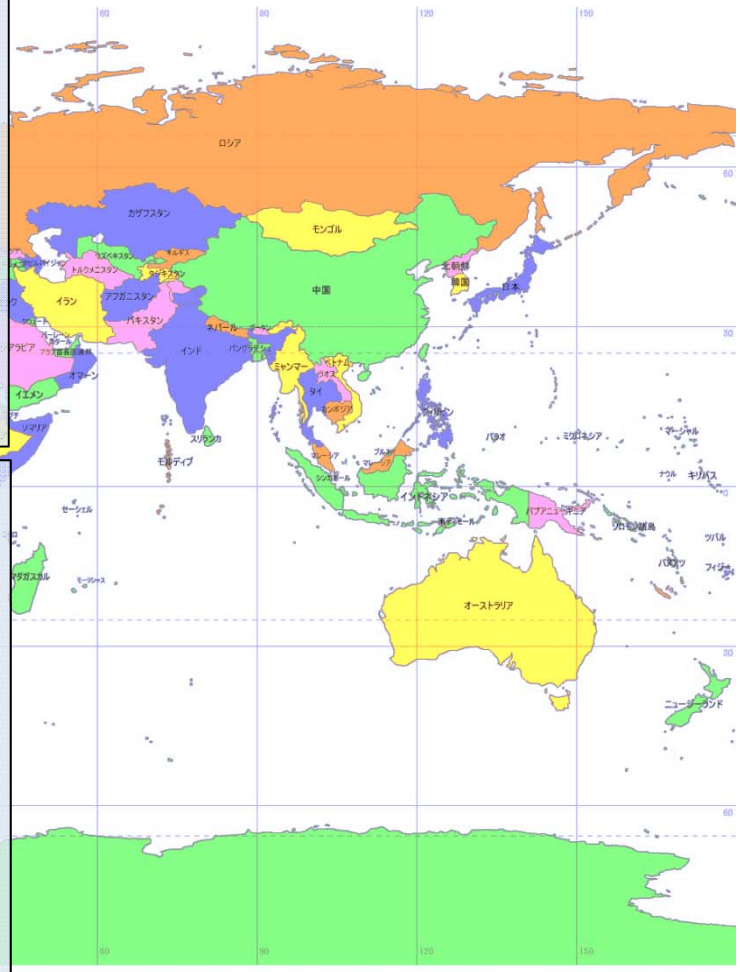


読み方説			漢字説	
外来説（朝鮮）	外来説（インド）	地形説	漢字二文字説	鳥説
人が日本に来住の宿とした場安宿（あすか）とけた。安宿（あ）は、朝鮮語でらかなるふるさいう意味のアン これが訛って.カ」になった。	仏教発祥の地インドのアショカ王の名前から転訛したもの。インドでは「アスカ」とは理想の楽園という意味の言葉だとも言われている。	地形を表現する単語が合成されて出来たものである。ア（接頭語）スカ（洲処ー川水、海水等によって生じた砂地）、またはアス（浅すー川、海等が浅くなる又は水が涸れる）＋カ（処）である。	阿須賀→明日香→飛鳥という様に変化していった。「明日香」は神である太陽（日）が文字の中に3つ付く。「飛鳥」は万葉集の一句にある「飛ぶ鳥」がアスカと読むようになったもの。	古代においては、年号に白雉、朱鳥、白鳳などと鳥の名前を用いることが多かった。鳥は尊い存在とされていた。アスカは「イスカ」という鳥の名前から転訛したもの。
説が出されたの20年（大正9年）版された『日本文化』（和辻哲いう本である。に出された説でため信憑性が薄			藤原宮跡の発掘により発見された木簡に書かれていた一文に「飛鳥」という文字があり、この木簡は七世紀末のものだと判断された。「飛鳥」の文字が使われた最古の用例である。	

結論

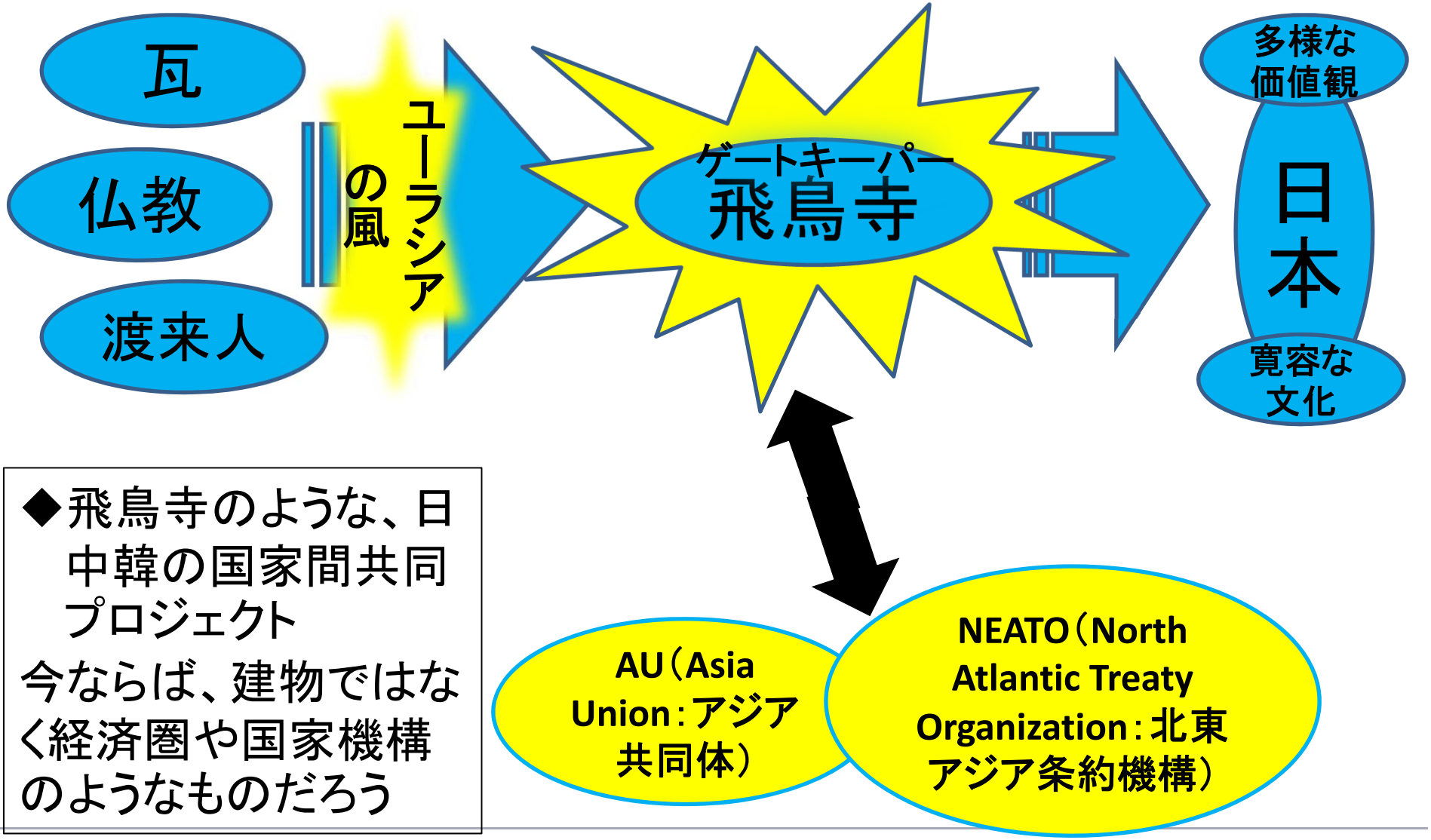






出所:財務省 貿易統計

結論



◆飛鳥寺のような、日中韓の国家間共同プロジェクト

今ならば、建物ではなく経済圏や国家機構のようなものだろう

ご清聴ありがとうございました